

新山遺跡群 奥陰田遺跡群

— 調査概報 —

米子市
教育文化事業団 4
文化財報告書



1993. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

例 言

- 1 この冊子は、鳥取県の実施する一般国道180号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報であり、1989年の調査開始から1993年3月までの内容を対象としている。
- 2 調査概報は、1991年に『新山 山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡』、1992年に『陰田 夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡』を刊行しており、今回は第3冊目となる。内容的に既刊の二冊と重なる部分もある。
- 3 遺構等の名称や内容は調査時に慣用したものに基づく。調査・整理は継続中であり、今後本報告書作成の過程で部分的に見直す可能性もある。
- 4 調査成果の内、製鉄関係遺跡については日立金属佐藤 豊氏と国立歴史民俗学博物館穴沢義功氏、胎上分析については奈良教育大学三辻利一氏のご指導ご教示を受けた。記して謝意を表す。

- 5 方位は国土座標（V系）方位を使用した。
- 6 本書の執筆・編集は、米子市教育文化事業団調査員加納真人（県派遣）、灘脇俊彦（同）、中曾千里、補助員佐伯憲昭、米子市教育委員会主任杉谷愛象があたった。

目 次

調査の経過	3
位置と環境	3
新山の遺跡	4
陰田の遺跡	11
ま と め	20

(図版目次)

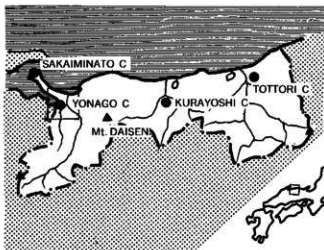
図版1	雌雄の土馬
図版2	新山の遺跡(1)
図版3	新山の遺跡(2)
図版4	新山の遺跡(3)
図版5	陰田の遺跡
図版6	遺跡の立地
図版7	山田古墳群
図版8	住居・建物跡(1)
図版9	住居・建物跡(2)
図版10	祭祀関係遺構(1)
図版11	祭祀関係遺構(2)
図版12	土坑(1)
図版13	土坑(2)、地層堆積
図版14	鍛冶関係遺構
図版15	遺物出土状況
図版16	土馬
図版17	土馬
図版18	遺物各種

(挿図目次)

図1	位置と周辺遺跡	2
図2	新山(萱原)遺跡分布	4
図3	山田古墳群(山田遺跡5区)	6
図4	山田遺跡(2~4区)	7
図5	研石山遺跡(1~4区)	8
図6	研石山遺跡(5区)	9
図7	下山遺跡	10
図8	奥陰田遺跡分布	11
図9	隠れが谷遺跡(1、3区)	13
図10	隠れが谷遺跡(2区)	14
図11	宮の谷遺跡	15
図12	新山の遺物(1)	16
図13	新山の遺物(2)	17
図14	新山の遺物(3)	18
図15	陰田の遺物	18
図16	住居・建物跡	19



図1 位置と周辺遺跡



- A. 調査地 (陰田)
 B. 調査地 (新山)
1. 門生古竈跡
 2. 岡横穴
 3. 陰田横穴墓群
 4. 目久美遺跡 (縄~弥生)
 5. 池ノ内遺跡 (弥生~古墳)
 6. 福市遺跡 (弥生末~古墳中)
 7. 青木遺跡 (縄文~奈良)
- ▲主要横穴墓 ●主要古墳

調査の原因と経過

本調査は、鳥取県が実施する一般国道180号（米子バイパス）道路改良工事に伴うものである。鳥取県道路課、米子土木事務所、鳥取県文化課、米子市教育委員会で取扱いを協議し、現地踏査（1985年・関係四者による）、試掘調査（1988年・米子市教育委員会）を経て、米子市教育委員会が県文化課の協力支援を得て実施することとなったものである。

国道180号線は、鳥取県西部を南北に貫く主要幹線である。バイパスは、交通渋滞の緩和と、より活発な交流促進を期して計画され、米子市陰田町の国道9号バイパスを起点として、陰田、新山を経て南進し、西伯町へと結ぶものである。当面、新山地内の県道米子・広瀬線までを第1期工事として事業実施されることとなった。延長は約2km、1997年度の完成予定である。

発掘調査は、1989年（平成元年）4月より地形測量、杭打ち等の準備作業に入り、同年6月26日より本格的に開始した。以来、範囲再確認、試掘調査も行いつつ、年度毎に継続し今日に至っている。1993年3月現在、新山の調査は終了し、陰田も1/3程度を残す状態である。この間、米子市での文化財体制見直しに伴い、1992年4月から、調査主体が教育委員会から財団法人米子市教育文化事業団（理事長 森田隆朝）に移行した。なお、調査報告書は2分冊とし、新山地内分を今年度（1993年度）、陰田地内分を現地調査終了後の1995年度に取りまとめる予定である。

位置と環境

調査地は、米子市新山及び陰田に所在する。

新山は米子市の南西部にあり、西伯町、鳥根県伯太町に接する。古来より要衝地域として知られ、谷筋は古代山陰道のルートとも考えられ、峠は出雲風上記の『手聞閃』にも比定されている。中世には標高287mの要害山上に、橋本の七尾城（宝石城）、会見町の手聞要害と並ぶ新山要害（長台寺城）が築かれ、近世には荷抜改所の指定や木戸の設置もあった（豆腐屋、萱原）。要害山と北側のドウ下山に挟まれた東西に細長い地勢で、谷平野に面した山裾部に酒屋側、岡、豆腐屋側、萱原の各集落が点在している。米子市街地を流れる加茂川はこの新山に源を發し、平野を流れて中海に通じており、流域には、有舌尖頭器・弥生集落の奈喜良遺跡をはじめ、宗像古墳群、東宗像遺跡、東宗像横穴群、長砂遺跡、池ノ内遺跡、目久美遺跡など主要遺跡が存在する。また、平野を東進すれば法勝寺川を経て青木遺跡、福市遺跡に達し、正面には標高1731mの秀峰大山の勇姿を仰ぎ見ることができる。

この地における遺跡は開発による緊急度も少なく、永らく未踏査地域として残り、岡横穴や若干の小古墳のほかは余り知られてはいなかったが、近年の調査によって、周辺の山麓台地などで弥生、古墳時代の集落跡や、前方後円墳を含む古墳群等の存在が明らかになりつつある。

一方、陰田は米子市の西端にあり、中海や鳥根県安来市に接する県境のまちである。南側に奥陰田、北側に口陰田集落がある。新山同様交通の要路であり、近世には出雲街道が通り、番所も設けられていた。中世には出雲・日御崎神社の犬田荘が置かれたとも言われ、口陰田には日御崎神社が祀られている。海陸合わせた地勢を有す地域であり、地内には、低湿地遺跡、集落跡、古墳・横穴群、古墓、土馬出土地など、縄文時代から近世までの多彩な遺跡が集中している。1980年から始められた国道9号バイパス工事では、陰田横穴群、陰田第9遺跡などが調査された。古代水田跡・集落跡の日久美遺跡、池ノ内遺跡にも近い。

新山の遺跡

菅原地内にあり、北西～西方向に入り込む谷筋に面した支脈丘陵に位置する。

菅原は新山の最初の集落である。谷筋は、今日では林道として僅かに関係者が利用するにすぎないが、近年まで陰田越、或いは安米市吉佐經由清水寺詣の道として頻繁な往来があった。

南側の谷口部から順次、山田古墳群、山田遺跡、研石山遺跡、下山遺跡と続き、前三遺跡は菅原集落を見下す東向きの丘陵に立地し、下山遺跡は対面の山裾斜面に在る。立地標高は約25～70mである。

遺跡は、狩り場、集落跡、古墳群、鍛冶関係遺跡、祭祀跡等であり、縄文時代、弥生時代、古墳時代、白鳳時代～平安時代、中世の各期に亘っている。

縄文時代 各遺跡において陥し穴状土坑が見られ、狩り場としての利用があったようである。土坑内に石炭が入り込んだ例もある（研石山5区SK-05）。時期的には研石山遺跡5区で早期押形文土器、山田遺跡5区、下山遺跡で晩期土器の散布があった。土器の散布に一定のまとまりが見られ、小規模な居住もあったようである。

弥生時代 主に山田遺跡を中心として形成される。竪穴住居跡、袋状貯蔵穴、段状遺構などがあり、谷を巡る丘陵傾斜地や

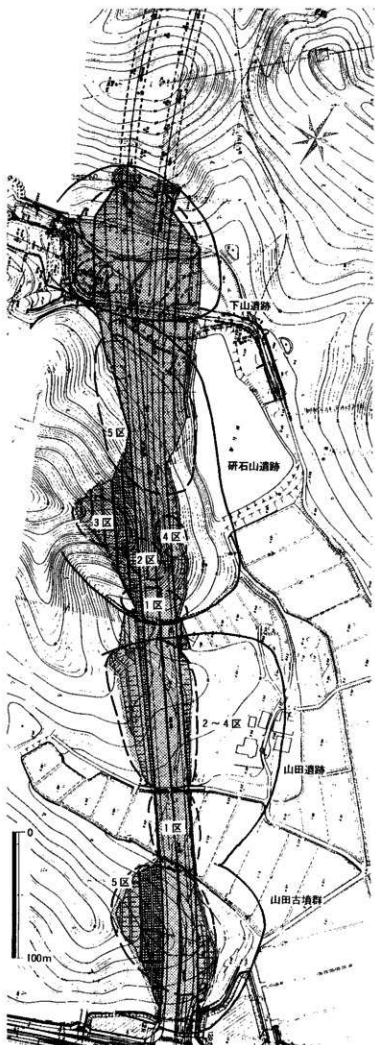


図2 新山（菅原）遺跡分布

尾根部に形成された集落跡である。一応、前期から後期までの遺物が見られるが、遺構として確認できるのは後期が多い。遺物の量からは少なくとも中期後半からは本格的な集落形成があったようであり、後世の流失、削平を受けたと思われる。分銅形土製品2、石庖丁なども出上している。後期後半には集落を見下ろす高所にも住居が築かれる（研石山2区・S I - 0 1）。直径が3mと小型ではあるが、後背のS S - 0 1（掘立建物？）、SK - 0 2（袋状貯蔵穴）等と一体となり一応のイエを構成したものと考えられる。

古墳時代 山田遺跡において前代から引き続き集落形成がある一方、谷奥の研石山遺跡での集落形成が本格化する。山田遺跡の集落は後期初頭で一応の終焉を見る。研石山は前期からの存在が認められるものの、中期から後期初頭に盛期を迎え、一旦途絶えたのち、後期後半に至り再び形成が見られる。時期により遺構分布に偏りが見られ、各遺跡内における消長移動を認めることができる。古式須恵器、移動式甕、火糞り臼、竪杵、ツチノコなどが特徴的である。

古墳は、集落の消長に対応するように築かれる。研石山1号墳は立地や形態から古墳時代中期を下らないものと思われる。山田古墳群は中期後半から後期初頭を主体とする。山田遺跡の北端に立地する谷の上1号墳は後期中葉期であり、集落の廃絶した跡地に築かれている。いずれも6~11mの古墳で構成される小古墳群である。山田1号横穴墓は後期後半の築造であるが、横穴としては比較的広く、後背墳丘や石棺を有する点など注目される。遺物には、古式須恵器（山田2号墳・TK208並行）、珠文鏡（山田7号墳）、円筒埴輪（山田8号墳、谷ノ上1号墳）、鉄剣、ヤリガンナ（研石山1号墳）、鉄刀、鉄鎌、人骨（山田1号横穴墓）などがある。

山田古墳群と山田集落跡の間の谷間では、古代流路と古式須恵器、ミニチュア土器、石製模造品などの遺物溜りを検出した。集落と墓域を結ぶ中間的位置に当たり、生と死の両空間を意識した祭祀跡と考えられる。

また、研石山遺跡5区では、石製の紡錘車、子持勾玉、双孔円盤が各住居跡に付属するような形で出上した。子持勾玉は県内19例目、米子市では福市遺跡、日下地内に次ぎ3例目である。

白鳳時代～平安時代初期 7世紀後半から9世紀初頭期の遺構遺物が見られる。鉄滓（鍛冶滓）や鉄製品（鋤先、紡錘車等）、焼土跡、炭溜りを伴い、鍛冶関係遺跡と思われる。

山田遺跡5区（山田古墳群丘陵）のSB-01は1間×2間（3.6m×4.8m）の掘立柱建物跡で、中央に長方形の炉跡を持つ鍛冶工房跡である。丘陵北側の山裾斜面を水平に削り込み、溝によって区画された広場を伴っている。炉跡付近から鋤先が出土した。7世紀後半から8世紀後半期の遺物を伴う。

山田遺跡は8世紀後半期に営まれた遺跡である。標高30~50mの山裾斜面に立地し、掘立柱建物が数棟ずつ、地形に即して弧状に配置される。建物は柱穴が小振りであり、いかにも作業小屋的な印象を受ける。焼土跡、炭溜りがあり、鉄滓や鉄製品が集中的に出土した。赤塗土師器の多いのも特徴である。研石山遺跡5区ではふいご羽口も出土した。

中世 この時期の活用はやや消極的である。北宋銭を伴う伏鉢を、山田遺跡5区（山田古墳群丘陵）の尾根1で2箇所検出した。鉢は土師質の摺鉢と焼締の捏鉢、北宋銭は熙寧元宝、嘉祐元宝、元豊通宝の各種があった。また、山田遺跡、研石山遺跡においても、焼締陶器、輸入陶磁等が見られた。山田遺跡1区では同時期と思われる土坑も検出した。

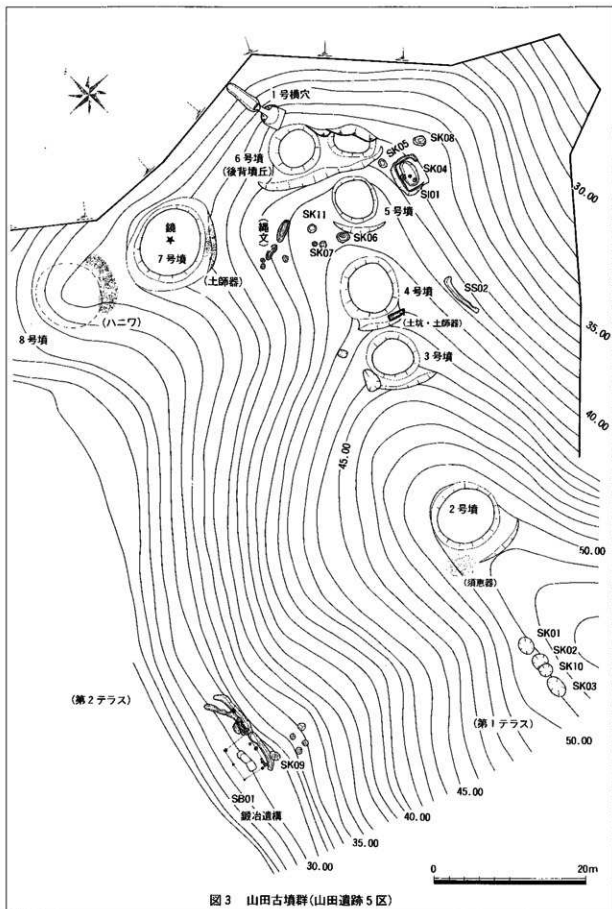


図3 山田古墳群(山田遺跡S区)

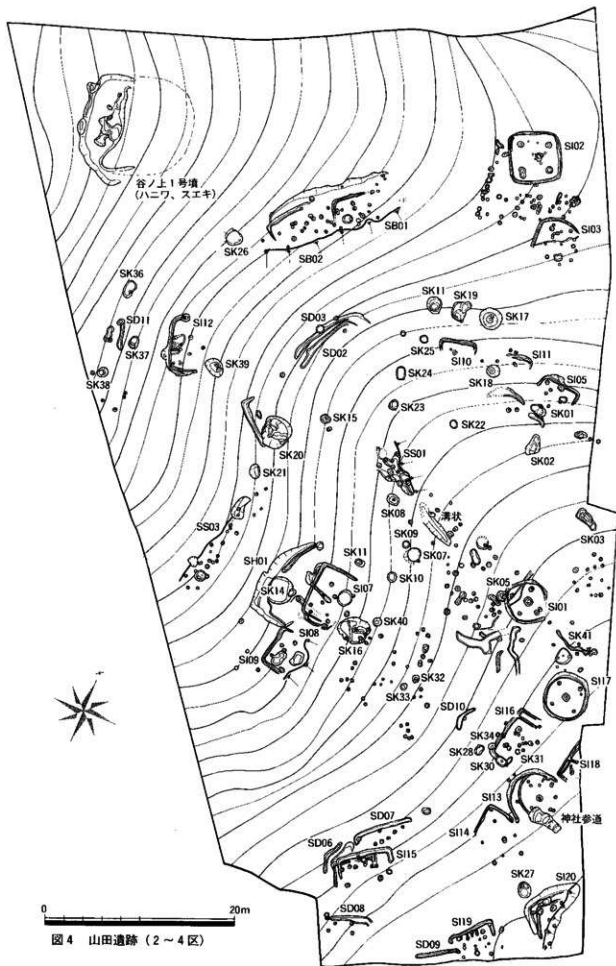


図4 山田遺跡 (2~4区)

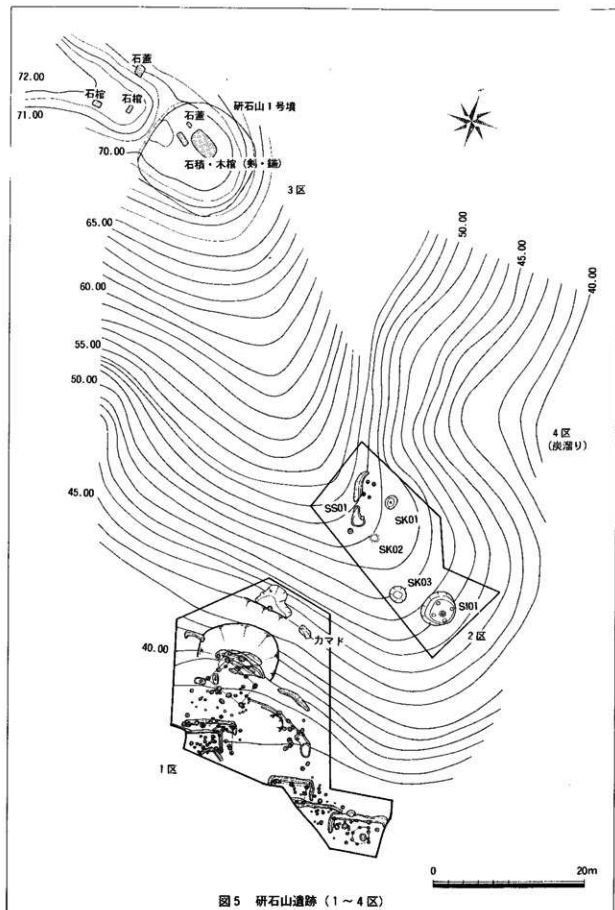


図5 研石山遺跡(1~4区)

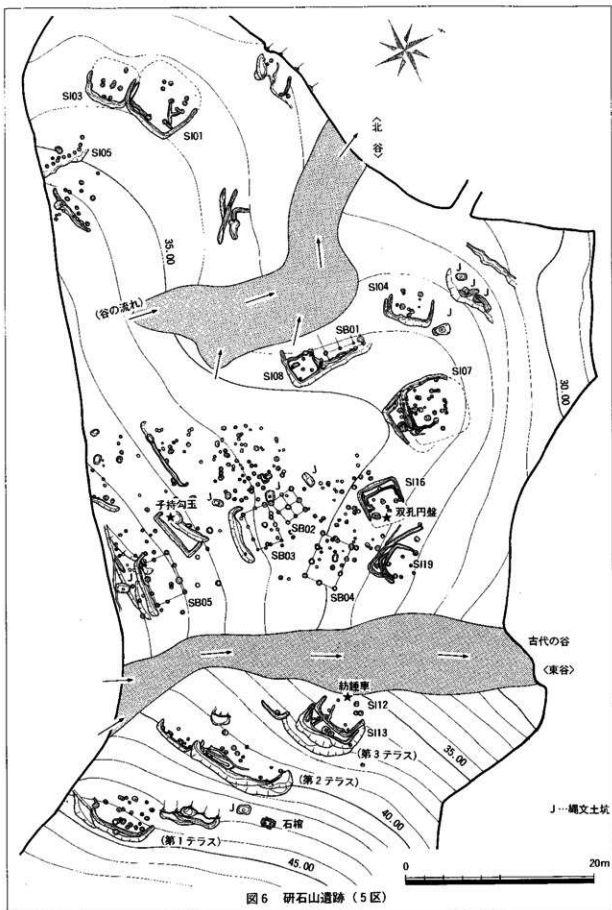
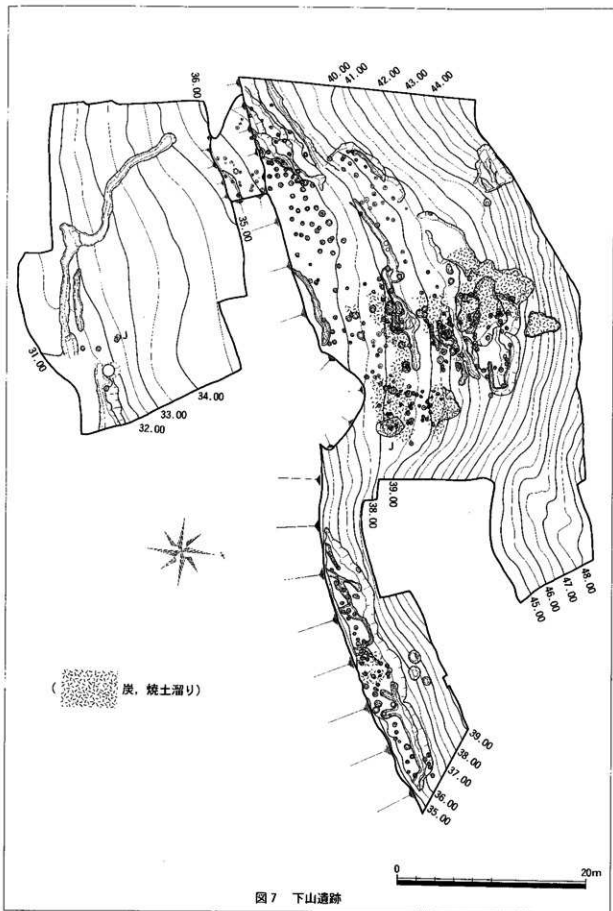
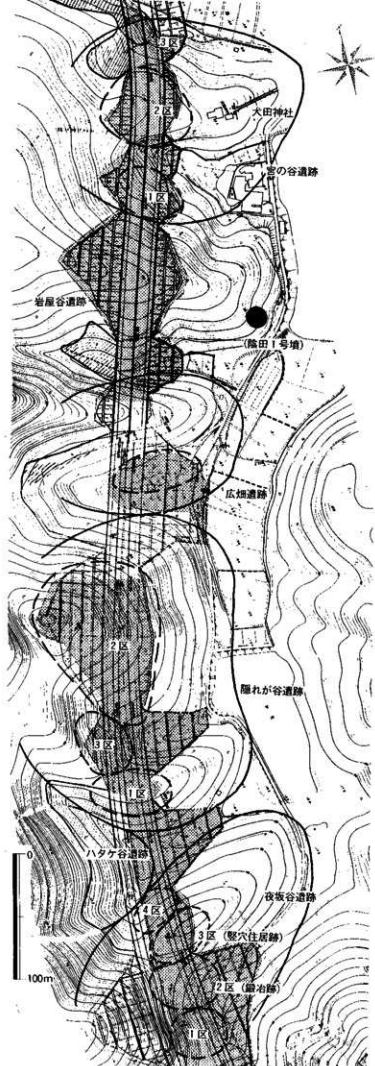


図6 研石山遺跡 (5区)





陰田の遺跡

奥陰田地内にあり、南に入り込む谷筋の丘陵地に位置する。丘陵は新山、伯太町との分水嶺ともなっている標高161mのドウ山(山)の支脈丘陵であり、谷に対して東向きに突出し、小さな谷を挟んでそれぞれが独立した形となっている。

大田神社のある丘陵から南の谷奥に向かって順次、宮の谷遺跡、岩屋谷遺跡、広畑遺跡、隠れが谷遺跡、ハタケ谷遺跡、夜坂谷遺跡と続く。立地標高は約15～80mである。夜坂谷は谷の最奥部に当たり、ここから峠を越えると約10分で新山に抜けることができる。岩屋谷丘陵の突端部には、米子市街地で最大級の横穴式石室を持つ陰田1号墳、土馬出土地・陰田第5遺跡がある。

陥し穴状土坑、上坑、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、溝状遺構、炭溜り、焼上跡、焼土坑などがある。狩り場、集落跡、鍛冶関係遺跡、祭祀跡等として活用されたものと思われる。縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、飛鳥時代～平安時代の各期を中心としている。

各遺跡とも調査継続中である。

縄文時代 隠れが谷遺跡で陥し穴状土坑2基のほか、各遺跡で石炭、黒曜石、ササカイト片を検出した。新山と比べて遺構遺物が少ないのは、丘陵がやや急峻なためかと思われる。

図8 奥陰田遺跡分布(アミ・調査区域)

なお、陰田地内の石織には、砕裂石織など弥生時代に属すると思われるものも多く、狩り場としての活用は弥生時代にも引き続いて行われていたようである。

弥生～古墳時代 谷奥の隠れが谷遺跡、夜坂谷遺跡において、標高50m前後の丘陵尾根を利用して小規模な集落形成が見られる。弥生時代後期末～古墳時代前期前半に限られる。夜坂谷S I-01は頂上やや南寄り肩部に立地し、6本柱を持つ不整形六角形（六角形気味）で、床面積7m、広さ38.4㎡の大型住居跡である。隠れが谷遺跡では現在5棟分を確認している。円形、隅丸方形プランで、規模は径5m程度とやや小型である。高台における集落形成はこの時期における一つの現象であり、地内でも陰田第1遺跡、陰田第6遺跡などが知られている。

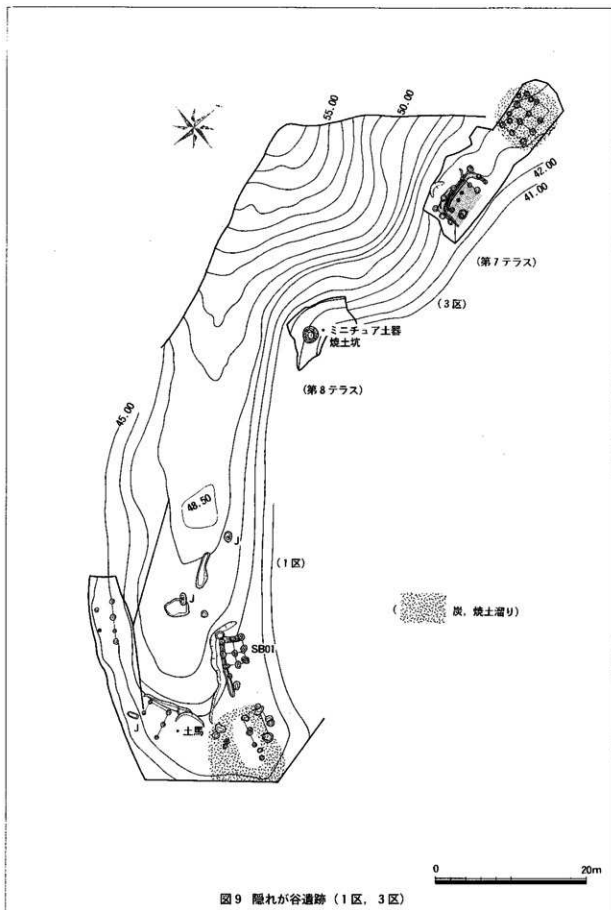
飛鳥時代～平安時代初期 古墳時代前期以降、一旦遺跡の形成は止まるが、飛鳥時代に再び活用が始まり、各遺跡毎の盛衰はあるものの平安時代初期まで続く。大まかに白鳳期、奈良時代後半期に画期がある。尾根部や斜面をテラス状に加丁し、掘立柱建物や焚火跡などがある。遺物には鉄滓、移動式竈、土馬、ミニチュア土器などがある。掘立柱建物は、総じて柱穴が大きく、地山をしっかりと掘り込んだものが多い。直径約0.6mが多く、0.8mを越えるものも見られる。鍛冶と祭祀にかかる遺跡群である。

夜坂谷遺跡は、南側斜面でが跡状焼土面と鉄滓、北側斜面で大規模な炭溜りを検出した。8世紀後半の遺跡である。

隠れが谷遺跡は、遺跡群の中心的存在であり、7世紀中葉から9世紀代まで続く。掘立柱建物跡20棟（内、総柱建物跡3棟）、大規模焚火跡4箇所、その他焼土面・焼土坑、炭溜り、ピット等を確認している。鉄滓の分布も見られる。標高76mの頂上を頂点に、尾根部、斜面部それぞれに遺構があり、山全体が有機的に活用されている遺跡である。頂上には一辺15m、高さ2mの方形テラスがあり、西側に焼土坑があった。標高50～65mの東向きの尾根部には総柱建物が建ち、その周辺や窪地を利用して大規模な焚火が行われている。須恵器などの遺物が少ない半面、19個体分の土馬が出土した。標高35～50mの南側斜面には掘立柱建物群が配置され、移動式竈、土製支脚、坏、皿類など炊飯・飲食的遺物が多い。谷奥の第8テラスには焼土坑があり、ミニチュア土器を伴っていた。尾根部の総柱建物S B-01は2間×2間で南北2.7m×東西3.2m、S B-017は2間×3間で東西3m×南北4mを測る。斜面部の掘立柱建物は地形に沿って東西に長く、2間×3間が主流を占め、1間×2間、2間×4間も認められる。梁行2.5～4.5m×桁行3～5.9mの規模である。

広畑遺跡は、遺跡群の初現的遺跡であり、密集度も高い。6世紀末～7世紀初頭に始まり9世紀代まで続く。南側斜面のテラスで、掘立柱建物跡と炭溜り、焼土跡、遺物溜りなどを検出した。移動式竈、土製支脚が目立つ。鉄滓の量も多い。

宮の谷遺跡は、大田神社裏の標高約29mの丘陵南斜面（2区）と、谷内に突出する標高約20mの小尾根先端部（1区）に形成される。それぞれに掘立柱建物約10棟、焼土坑、炭溜りなどがあり、鉄滓も出土した。2間×3間が主流を占め、2間×2間、2間×4間もある。梁行3～4m×桁行3.8～6.2mの規模である。1区のS B-01では土師質の土馬を検出した。同じテラス上に並ぶS B-02は2間×3間（推2.5m×3.7m）の総柱建物と思われる。1馬が総柱建物に関連して出土する状況は、隠れが谷遺跡と同様である。7世紀後半～8世紀後半の遺跡である。



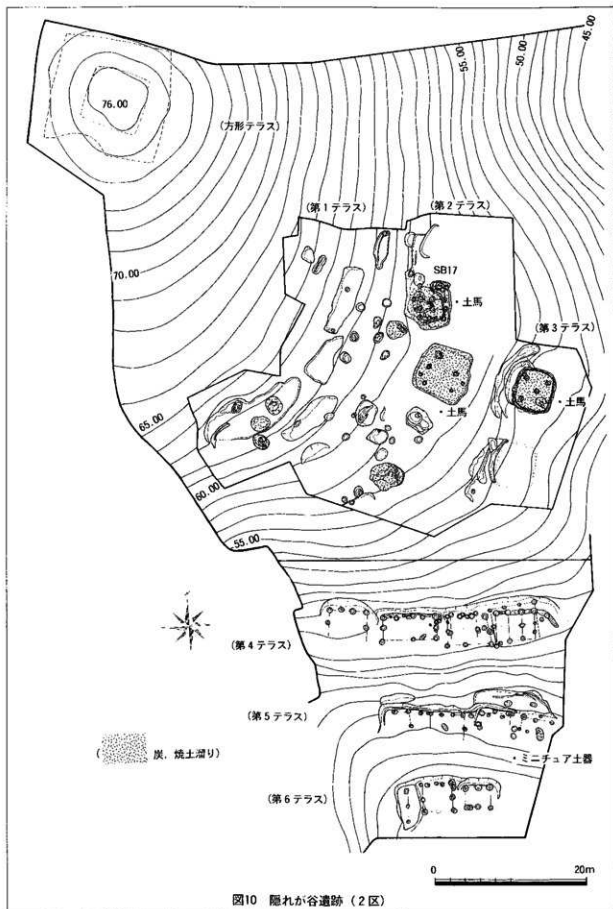


図10 隠れが谷遺跡(2区)

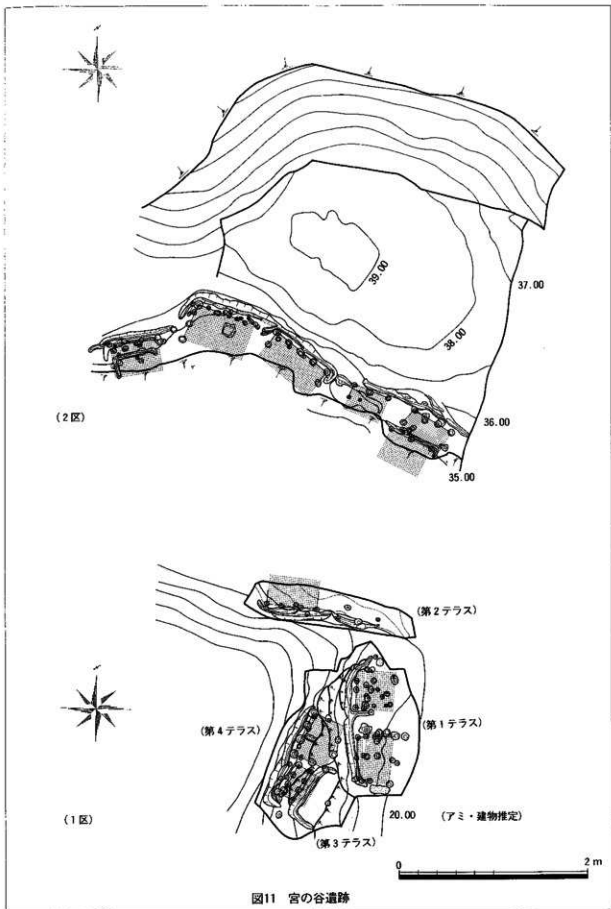


図11 宮の谷遺跡

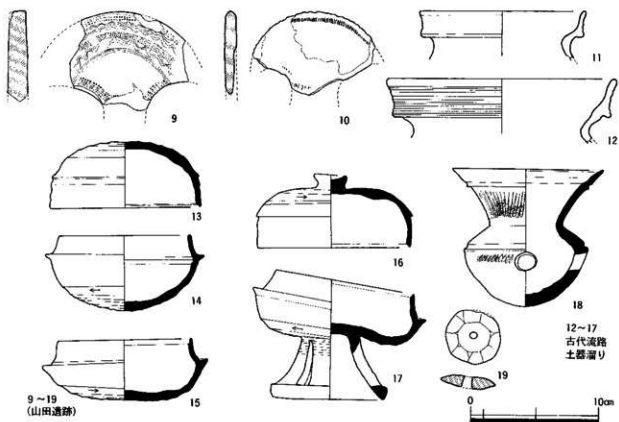
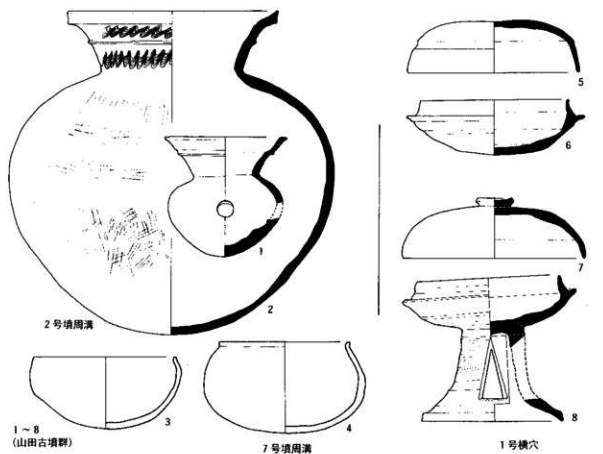


図12 新山の遺物¹⁾

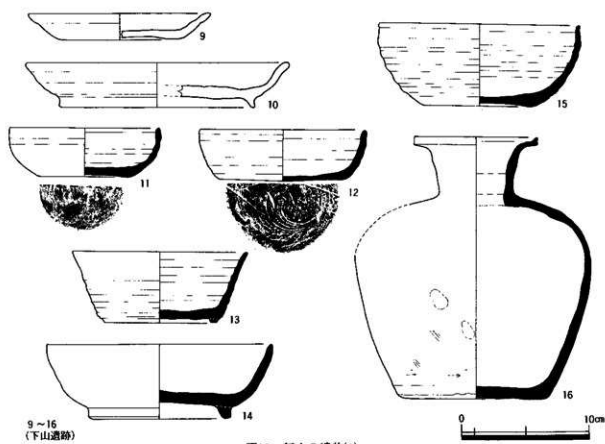
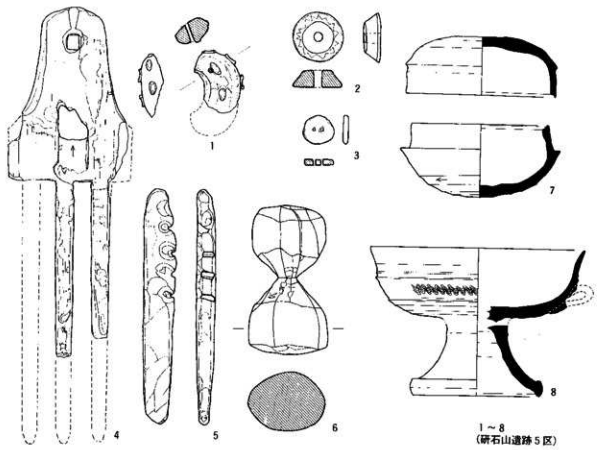
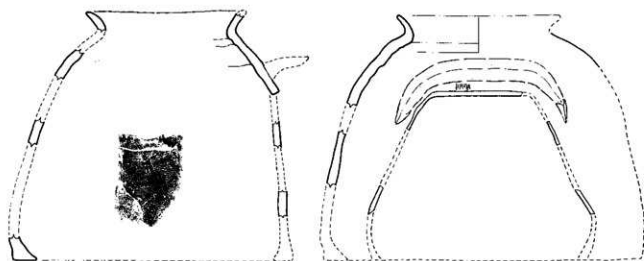


図13 新山の遺物(2)

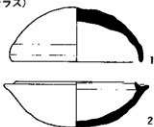


古式壺形土器 (研石山遺跡 5区)

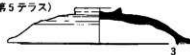
0 10cm

図14 新山の遺物(3)

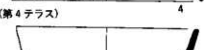
(第6テラス)



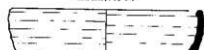
(第5テラス)



(第4テラス)

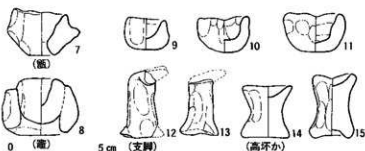


(回転糸切り)

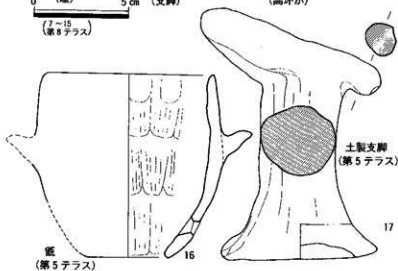


(回転糸切り)

隠れが谷遺跡



0 5cm
(7-15 第8テラス)



壺 (第5テラス)

土製支脚 (第5テラス)

17

図15 陰田の遺物

0 10cm

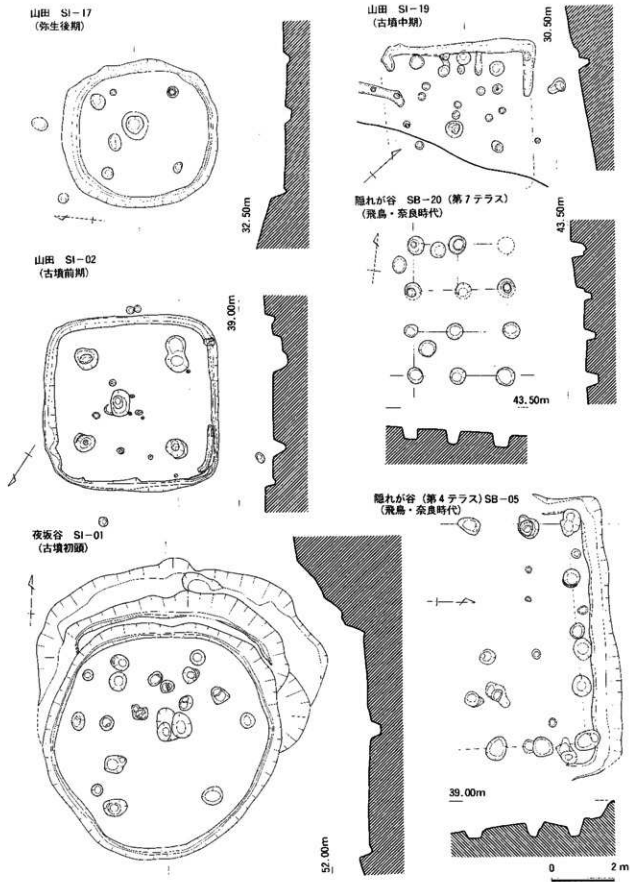


図16 住居・建物跡

ま と め

古墳・横穴9基、堅穴住居50棟、掘立柱建物75棟、土坑105など300余の遺構と関係遺物を検出した。縄文時代から中世まで続く、狩り場、集落、祭祀、鍛冶関係等の遺跡である。

集落の形成 大まかに、弥生時代後期から古墳時代後期初頭と、古墳時代後期後半から平安時代初期の二次に亘って行われる。

第1次の形成は、新山の山田遺跡、研石山遺跡を中心として展開される。基本的に山裾の低位丘陵に立地し、丘陵内の小谷地形によって各々が小単位を成す。分銅形土製品、珠文鏡、双孔円盤、子持勾玉、火鑽白などがあり、最終末には古式須恵器、移動式竈も持つ。水辺での祭祀も伴う。弥生後期後半から古墳前期前半の谷奥高所への進出分材は、社会的な緊張状況の存在と、谷筋が利害を伴う主要な位置にあったことをうかがわせる。

第2次の形成は、陰田の広畑遺跡、隠れが谷遺跡を中心になされ、奈良時代後期には陰田と新山の両地域におよんでいる。丘陵尾根や山腹に立地し、鉄滓、移動式竈、土馬、ミニチュア土器、焚火跡、焼土坑などがある。鍛冶関係の遺跡であると共に、土馬と火を多用した祭祀址である。これらは、土馬祭祀が陰田に集中し、建物規模が新山が小さく、陰田が大きめであるなどの差異はあるものの、互いに補完し合う一連の遺跡として理解される。

遺跡の特徴 遺跡を特徴付けるのは土馬と鉄滓、移動式竈、古式須恵器である。

土馬は総柱建物、焚火跡などに伴って出土し、その場所は谷奥の尾根上で、高所に集中する。裸馬、飾馬双方があり、雌雄の性別を表すもの5個体がある。性別を表す例は全国に20例程度と少なく、しかもほとんどが松江市に集中するという特徴を持つ。出土品には、形態的に松江市例と類似するものも多い。両地域の関連性が注目される。

各遺跡から鉄滓を検出し、山田遺跡では鍛冶炉を伴う工房跡も確認した。鉄滓には精錬鍛冶滓も多く、近隣には製鉄遺構も存在するものと思われる。大鍛冶、小鍛冶を合せ持つ同様の遺跡は近年、隣接する安来市でも増加している。地域全体が一人製鉄関連地帯であったようである。当時の交易や、調・庸の物納（鍛、鋤等）の事象等との関係を体系的に考える必要がある。

古式須恵器は陶邑TK208～TK47に対応する。胎土分析によると陶邑領域が多く、地方の安来市門生領域、松江市池の奥領域も認められ、伝播・流通のひとつの形を示した。また領域未定遺物には形態的に他者と容易に区別できるものがあり、分類の手法としても有効と思われる。

移動式竈は古式須恵器の段階から見受けられ、順次、形態的な変遷を辿ることができる。比較的早い時期からあり、出土例が多い山陰の位置付けや使用集団の性格を語る上で貴重である。

遺跡群の位置 調査の成果は陰田と新山のそれぞれの特性を示すと共に、単にこの地方のみでなく、主に安来、松江地方との深い関係を持ちつつ、極めて広域的な広がりの中に在ったことを示した。特に、集落の第2次形成期は海水面の上昇期でもあり、弓が浜半島は無く、中海は外海と直接つながっていた。当時の古地形からは、陰田周辺には湾が形成され、港の存在も想定できる。谷筋の道は新山を経て内陸部へと通ずる要路として位置付けられる。双方の谷の基部に古墳が築かれ、陰田1号墳の石室が谷奥に開口していることも無縁ではない。鍛冶と土馬祭祀に関わる人々が存在し、海陸の交通を介して、古代出雲文化圏の一端を担っていたものと思われる。

図版 1 雌雄の土馬（隠れが谷遺跡）



（隠れが谷遺跡）

図版 2 新山の遺跡(一)



山田遺跡(2~4区)

研石山遺跡(1区)

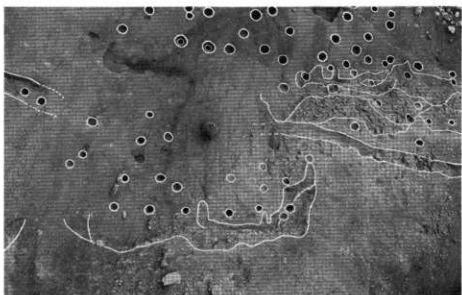


研石山遺跡 (5区)

図版 3 新山の遺跡(2)

研石山遺跡 (2~4区)

図版 4
新山の遺跡(3)



- 下山遺跡
☐ 遠景(南東より)
☐ 空中写真
○ 建物跡ピット群



遠望（隠れが谷上空より）



隠れが谷遺跡（2区）

図版 6
遺跡の立地

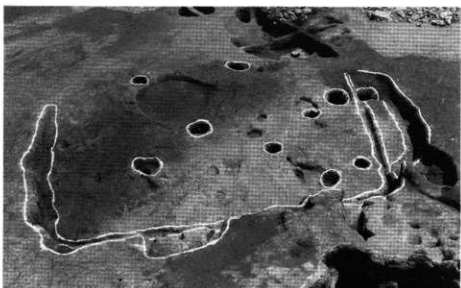
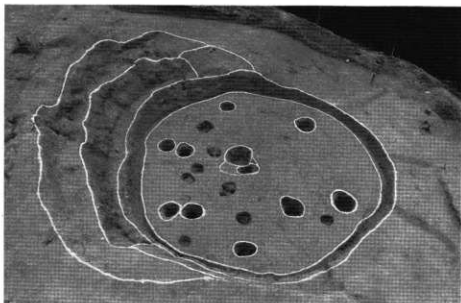
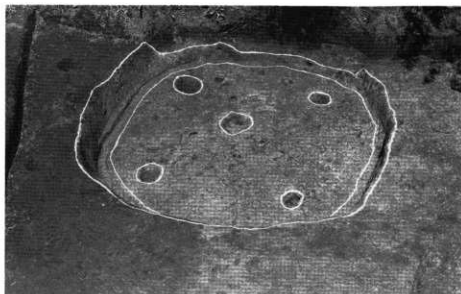


- 研石山遺跡
- 山頂の古墳
(3区・古墳前期?)
 - ▨ 中腹の住居跡
(2区・弥生後期)
 - ▣ 山裾の建物跡
(1区・飛鳥～奈良)

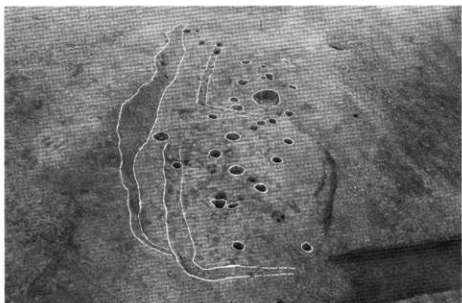


□遠望（北より）
□古墳の並び（西より）
□横穴の内部

図版 8
住居・建物跡(1)

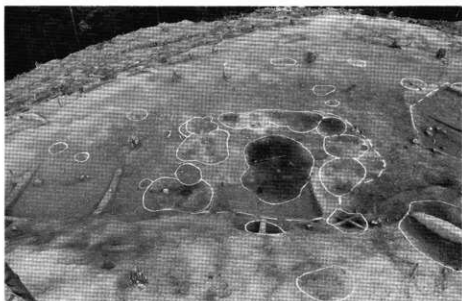


- ☐山田 SI17
(弥生後期)
☐夜坂谷 SI01
(弥生末～古墳初)
☐山田 SI08
(古墳中～後初)

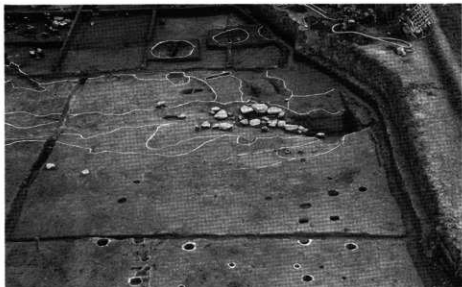


- 宮の谷 2 区
(奈良)
- ▨ 山田 SB01, 02
(奈良)
(SI と重複)
- ▩ 隠れが谷 SB01
(奈良～平安)

図版 10
祭祀関係遺構 (1)



- 山上の火祭り
一隠れが谷遺跡
☐尾根と斜面の使い分け
☐斜面の建物群
○尾根部の祭祀跡



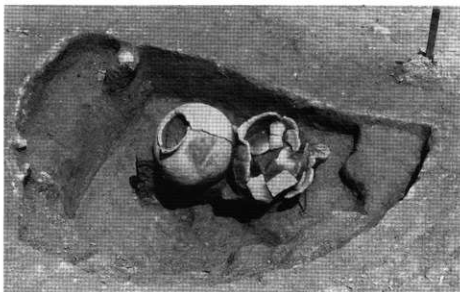
水辺の祭祀
—山田遺跡1区
☐谷合いの古代流路
(南より)
☐川辺りの土器溜り
(古式須恵器と土師器)



カマドの祭り？
—研石山遺跡1区
☐岩肌をくり抜き
カマドを設置



図版 12
土 坑
(1)



山上の袋状土坑
(貯蔵穴?)
—山田遺跡5区
(山田古墳群)
□北側斜面に並ぶ
土坑の大きさ
□土坑上部の土師器壺
(古墳時代前期)



☐有孔土坑（おとし穴）

研石山遺跡 5 区
（縄文時代）

▨袋状貯蔵穴

山田遺跡
（弥生時代）

▧谷部の堆積

山田遺跡 3 区

黒色土中位が弥生時代層



山田遺跡 5区
第2テラス

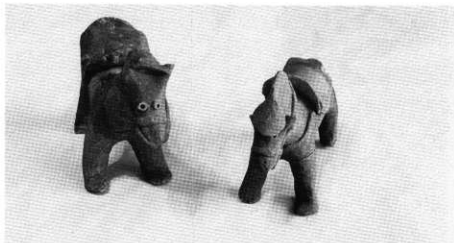
- 全景
- ▨ 伊 跡
- 出土鋼先



- ☑ コシキと土製支脚
研石山遺跡 5区
- ☐ 古式須恵器
研石山遺跡 5区
- ☑ 堅 杵
研石山遺跡 5区

図版
16
土
馬

隠れが谷遺跡
(第3テラス)



(第2テラス)

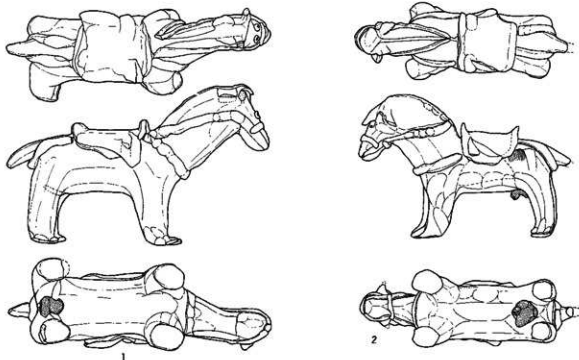


(第2テラス)

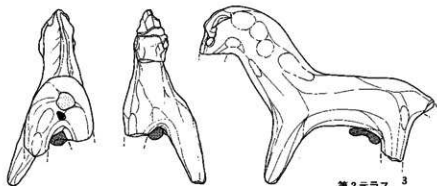
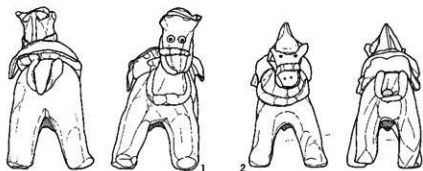


隠れが谷遺跡
宮の谷遺跡

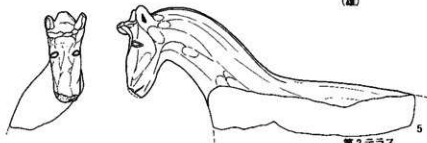




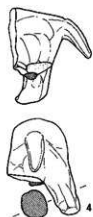
第3テラス
(左一組)



第2テラス
(雄)



第2テラス



第11テラス
(雄)





石 鉄
(山田遺跡)
祭祀遺物
ニニ子ノ了土器



石製の羅車
鏝片
勾玉
(山田遺跡)



珠文鏝
(山田了号墳)



分銅形土製品
(山田遺跡)



祭祀遺物
(應九ヶ谷遺跡)



土製土脚
(應九ヶ谷遺跡)



須恵器
(應九ヶ谷遺跡)